

オリンピック 1964 年大会と東京の「未来」 —そのイメージと実情に関する歴史的研究—

Olympic Games 1964 and the “Future” of TOKYO —A historical study on its image and reality—

1K03A047-2

小川 武倫

指導教員

主査 石井昌幸先生

副査 寒川恒夫先生

はじめに

東京は、20世紀になって関東大震災と東京大空襲によって二度も壊滅的な打撃を受け、焼け野原と化した経験を持つ、世界でも例を見ない都市である。江戸と呼ばれていたこの街は、日本の近代化の歴史の中で「東京」になっていった。しかし、明治以降、第二次大戦後の復興期までの東京は、依然として生活文化のなかに一定の連続性を有していたように思われる。筆者が生まれた 1980 年代、「東京」は既に「東京」であった。首都機能は整備され、戦後の都民が夢見た未来への基盤もほぼ完成形となり、西へと肥大化していった東京は、バブルを契機に臨海副都心へと収縮していく次の段階を迎えようとしていた。本研究では、こうした「東京」が形成されていく大きな加速台となった東京オリンピックと、その前後に東京が経験した変化の歴史的経緯を、文献資料や映像に基づいて明らかにしていく。

第 1 章

第 1 章では、記録映画「東京オリンピック」の中で、映し出された東京の変化を読み解いた。この映画においては、オリンピックの理念やオリンピックが内包する開催都市東京の変化が、短い時間の中でもセンセーショナルな形で映し出されていた。

第 2 章

第 2 章では、大戦で首都機能の大部分を失った東京が東京オリンピックを開催するまでに通過してきた復興の様子を追っていった。回復作業は確かに進んではいるが、人口の集中やモータリゼーションに整備が追いついてはおらず、意気消沈したままの日本が、起爆剤となるものを待っている様子を読み取ることができた。

第 3 章

第 3 章では、アジア初となるオリンピックの東京開催を目指す、主にスポーツ界の行政的なリーダー達の動向を追っていく。国際的に認められたという証の一つとして、オリンピック開催という目標を掲げ、東京都・政府・日本体育協会が中心となって、東京を都市に成長させるための様々な準備が行われたことがわかった。

第 4 章

第 4 章では、東京が首都として目指した未来がどこにあったのかを、後に未来都市の象徴として映画の

中で用いられている東京や、科学技術の発展の中に探っていく。未来都市のランドスケープとしての首都高速などが、復興しつつある東京に暴力的なスケールで挿入され、様々な「排泄物」を覆い隠していく。オリンピックそのものもまた、科学技術により「未来」を予感させるものであった。

第 5 章

第 5 章では、競技施設やそれに付随する首都高速や周辺道路、その他の交通機関などの物理的環境の変化を追っていく。空港や宿舎、競技場など、またそれを繋いでいく交通機関は東京の景観に決定的な変化を及ぼした。またその変化は市外全体にわたって均等に現れたわけではなく、あくまでその周辺が中心となり、その過程で都心が西へと移動していったことがわかった。

第 6 章

第 6 章では、ゴミ・尿尿の処理システムや上下水道の整備など、生活様式が都市化していく様子を追っていく。自家処理と相互扶助システムによって生活上の問題群が処理されていた状態から、多くの生活領域において専門機関が成立し専門的処理がおこなわれるように変化し、それにより近郊農村が宅地化されることによって、農業と都市が決定的に離れていったことが明らかになった。

第 7 章

第 7 章では、オリンピックを目標に、急ピッチで推し進められた東京の未来都市化の中で、公害やゴミ処理場、壊滅した漁業などの、噴出した問題や代償として失われたものを見つめる。オリンピックは、公害が公害として社会問題化する重要な転換点になっていたことがわかった。

おわりに

本研究では、東京の物理的環境と都民の生活様式の変化を追っていった。現在の東京のそのほとんどは、オリンピックまでにできあがっていたこと、さらに、現在における「近代的生活」の基本的な部分も形成していることがわかった。人々の生活様式は「都市化」により「近代化」が達成されていく。何をつくり、何を隠そうとしてきたのか。「東京」がこれからも存在する限り、これらは再検討し続けなければならないし、再発見され続けなければならない。